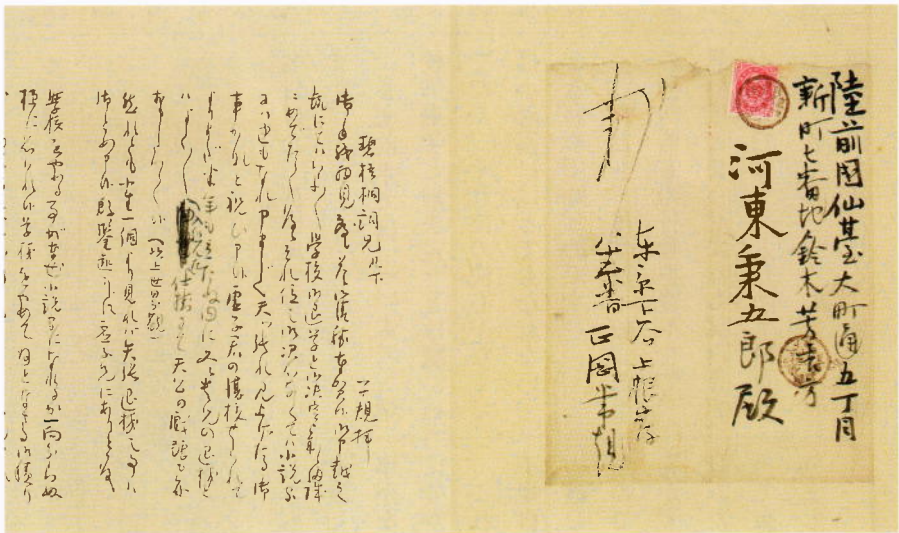


# やまとの名品 天理図書館



まさおか し き しょかん  
**正岡子規書簡**

かわ ひし へき ごとう  
 河東碧梧桐宛

明治27年10月29日付

縦24cm 横90cm

「柿くえば鐘が鳴るなり法隆寺」の句で知られる俳人・正岡子規が、同郷松山出身で六つ年下の河東碧梧桐（かわとうへきこくちう）から便りを受け取ったのは、明治二十七（一八九四）年十月、日本新聞社へ入社して二年目が過ぎようとする頃でした。

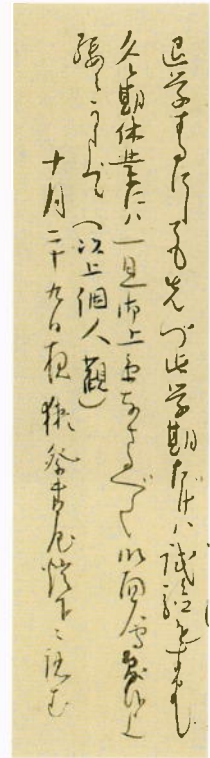
碧梧桐は、高浜虚子（たかはまきよし）と並んで子規門下の双璧（さうへき）と謳（うた）われた人物です。仙台の第二高等学校（現東北大学）の学生であった彼の胸中には、小説家になりたいという大夢があり、この時、いよいよその熱い思いを抑えきれなくなっていたのです。

子規の碧梧桐に宛てた本返信は、自ら「世界観」「個人観」と

名付けた二部構成で書かれています。

まず前半では、「いよく学校御退学と御決定」とは誠にめでたく、それ位の決心がなくて、は小説家にはとてもなれない、ときわめて好意的です。

けれども、後半は一転。前半の約四倍もの行数を費やして、思いとどまらせようと試みます。文中では、一人分の生活費なら何とかなるといふことこそ世間知らずも甚（はな）だしく、独学の難



しさも分かっているようにだと言論し、さらに「学校をやめる事がなぜ小説家になれるか一向に分からぬ」と切言（せつげん）を重ねます。これらは帝国大学を中退した子規自身の反省であり、後進への厳しくも温かい思いやりだったので。しかし、その想いは届かず、意志を貫いて退学してはみたものの、結局は子規を頼って東京へ出てくる碧梧桐でありました。

（天理図書館 三村 勤）

天理図書館のお知らせ Tel : 0743 - 63 - 9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○天理図書館開館84周年記念展「手紙-筆先にこめた想い-」

日時：10月19日（日）～11月9日（日）9:00～15:30 会期中無休・入場無料  
（本欄で紹介した手紙も出品します）

○11月の休館日：23日・28日